



# 覗く眼

第6回

のんびりとした千餓村とは対照的に、東京は慌ただしく動いていた。正確に言うならば、警察機構の上層部はやけに慌ただしかった。

\*

同時にそれは、異例の光景だった。

ひとりの警察署長が、権力の最上層に位置する警察庁長官の眼前にいるのである。しかも、その本拠地とも言うべき警察庁内の、長官室で。

部屋の中にはもうひとり居るが、これは警視総監。いずれにしても、一介の警察署長がこのような形で会う階級の人間ではない。

「まったく、よりによってあんなのを行かせるとはね」

長官の言葉から、酷く憤慨している様子がうかがえる。

「本当に、申し訳ございません」

頭を深く下げる署長の口からは、さっきからこの言葉しか、出てきていない。

「大内源治っていうのは、国鉄や銀行の事件の時もずっと嗅ぎまわっていた人間だろう？」

驚くべきことに、警察機構のトップとも言える長官の口から、末端に近い警部に過ぎない、源治の名が出た。

「は、はあ」

署長の方は弱り切った目で総監の方を見るが、こちらはこちらで（俺の方を見るなよ）、といった感じで、遮る。

「どうしてそんなややこしい人間を、あの村に行かせんだ」

「いえ、難事件だと思いましたが、彼のような経験豊富というか、執着心があると言  
うか・・・」

「ふん。どうせ厄介払いのつもりだったんだろう」

しどろもどろの警察署長に向かい、長官は容赦なく続ける。

「だいたいその経験とか執着心と言うのが、大いに問題なんだよ。今は」

長官は、歯ぎしりするように言葉を吐いた。

そして続けて、出るはずがない名も口にする。

「佐倉の家でも、しつこく食い下がったそうじゃないかね」

「本当に、申し訳ございません！」

署長は署長で、体が前のめりにつっこんでいくような勢いで、頭を下げ続ける。それにしても、何故警察庁長官の口から、あの辺鄙な村の家の名が出るのか・・・。

「さっさと引き上げさせる事はできんのかね？」

「はあ、あの男の任された事件に関する執念と言うのは、それは凄いものがありまして・・・

」

助けを求めるように総監の方を再び見るが、こちらはやはり取り合おうとはしてくれない。

「私の言う事ではないが、部下に言う事を聞かせることができないような人間は、上司の資質は無いと思うがね」

長官自らが警視総監の方をチラリと見ると、今度は総監の方も頷く。署長の震えあがるような気持ちは、いかばかりのものだろうか。

「ふん。まあ良い。あんな厄介者と関わってしまった君には、少しは同情もしてるよ。ここにいる総監なんて、あんな男と関わらないから順風に出世できたようなものだ」

長官の言葉に、今度は総監が不安な表情を浮かべる。

「頃合いだ。どうせあの村は、そろそろ限界だった。ここらあたりで、区切りをつけても良からう」

「あの、一体あの村には何が・・・」

「君は余計な詮索をせずに、あの男を引き上げさせる事だけを考えろ！」

一喝され署長は俯き、総監はこの事態に、再び傍観を決め込むだけだった。

中央での動きに対して何か運命めいた糸が繋がったのだろうか。千餓村の方でも事態が動きつつあった。

もっともそれは、村そのものではなく管轄する県警署内での出来事だった。

「本当なのかい？ それは」

「ええ。受けたのは私ですからね。間違いありません」

「第一発見者は、あの村の住人ではないんですね」

源治に続き、沢井が念を押して尋ねる。

「はい。ドライブ帰りの、他所の人間ですよ」

「その連絡先はわかるかい？」

「ええ。ちゃんと聞いてますからね」

事件の事を受け付けたという警官は、積まれた書類を漁る。事件とは言うまでもなく、千餓村での殺人事件だ。

「これですよ」

警官が差し出した書類に目を通した源治と沢井は、しばし沈黙し、顔を見合わせた。

「おやっさん。俺たちが見た書類の発見者とは、違いますね」

沢井の小さく囁く声に、源治も頷く。

「あの、本庁からお二人に電話が入ってるんですが」

沈黙を破ったのは、別の警官からの伝言だった。

「おやっさん。俺、出てきます」

「おう」

源治は沢井を電話口に行かせ、自分はむさぼるように書類に目を通し続けた。発見者の箇所以外、違っているところはない。

「彼女とのドライブの帰りで、用を足したかったらしくて降りたら死体を見てしまったそうです。そりゃあもう、真っ青な顔でやって来ましたよ」

「それで、現場にはあんたも行ったのかい？」

「いえいえ、私は行ってませんよ。その後の事は一課の仕事ですからね」

警官のそれ以上の事は我関せず、といった態度に、源治は軽く苛立つ。この男から情報を得ようとする立場でなければ、怒鳴りつけるだろう。

けれども、いよいよ源治を苛立たせる事が戻って来た沢井から告げられた。

「おやっさん。すぐに東京に戻って来るように、って事なんですけど・・・」